洋１６－１５１

「手紙は憶えている」　　＊＊＊＊＊

２０１６（平成２８）年１０月２９日鑑賞＜ＴＯＨＯシネマズ西宮ＯＳ＞

監督：アトム・エゴヤン
脚本：ベンジャミン・オーガスト
ゼヴ・グットマン（９０歳のユダヤ人の老人）／クリストファー・プラマー
マックス・ザッカー（ゼヴの友人、車椅子の老人）／マーティン・ランドー
チャールズ・グットマン（ゼヴの息子）／ヘンリー・ツェニー
ジョン・コランダー（ルディ・コランダーの息子）／ディーン・ノリス
ルディ・コランダー（４人の容疑者の１人）／ブルーノ・ガンツ
ルディ・コランダー（４人の容疑者の１人）／コルゲン・プロホノフ
ルディ・コランダー（４人の容疑者の１人）／ハインツ・リーフェン
２０１５年・カナダ、ドイツ映画・９５分
配給／アスミック・エース

＜クリストファー・プラマーが出ずっぱりの主人公を！＞

クリストファー・プラマーと聞けば、私は７人の子供たちの断格な父親・トラップ大佐役を演じた『サウンド・オブ・ミュージック』（６５年）を思い出してしまう。アトム・エゴヤン監督はパンフレットの中で「主人公は９０歳。そんな年齢の俳優で、長編映画を引っ張っていけるような男はそんなにいない。そんなことを考えながら読んでいるうちに、描けるべきお話い当たったんだ」と語っている。クリストファー・プラマーは近時も『人生はビギナーズ』（１０年）（『シネマルーム２８』２００頁参照）で演技部門ともいえる最高齢の８２歳でアカデミー賞助演男優賞を受賞する活躍を見ているからすごい。

本作冒頭、ベッドから起き出したゼヴ・グットマン（クリストファー・プラマー）が姿勢ルースの名前を呼びながら歩き始めるが、そこは自宅ではなく老人ホーム。しかも、担当の看護師からルースは一週間前に亡くなったと説明されると納得し、自分が強度の認知症を患っていることを再確認させられることに、しかし、車椅子生活を余儀なくされている友人のマックス・ザッカー（マーティン・ランドー）と２人で朝食をとり始めると、ゼヴは微然正気を取り戻し、何やら重大そうな「密談」を２人で開始することに・・・。

＜手紙を狙にホームを脱出！その目的は？＞

老人ホームからの集団脱出劇を描いた中国映画『グオさんの仮装大賞（飛越老人院）』（１２年）はメチャ面白かったが、その目的は天下国家のお話だった。しかし、最初にたどりついた目的地で「ルディ・コランダーさんはいますか？」と尋ね、家族から部屋に案内されると、あっと驚く展開になるのでそれに注目！

部屋の中でルディ・コランダーと名乗った相手もゼヴと同じくらいの老人だったが、ゼヴが、ソファに座って対応しているその老人に対していきなり拳銃を向け「惑に向かって立て！」と命令したから、相手はもちろん私を含めた観客も全員ビックリ！この一連のやりとりを見て、やっとゼヴのマックスはアウシュヴィッツで殺された家族の復讐のために、アウシュヴィッツのある区画の責任者だったナチス親衛隊の男を探し求めて、老人ホームを脱出したことがわかってくる。そして、マックスは車椅子で動けないから計画を練り、認知症がちもコトの詳細を書いた手紙さえあればしっかり動けるゼヴはルディ探しとその殺害の旅に出たというわけだ。

＜ルディ・コランダーを探せ！＞

本作はスパイ映画でもミステリー映画でもなく、またロードムービーでもない。しかし、導入部の展開を見ていると、９０歳の認知症の老人ゼヴの３日ヨタ方ヒーム旅ながら、そんな雰囲がタップリ入っているところが面白い。しかも、最初にたどりついた目的地で「ルディ・コランダーさんはいますか？」と尋ね、家族から部屋に案内されると、あっと驚く展開になるのでそれに注目！

部屋の中でルディ・コランダーと名乗った相手もゼヴと同じくらいの老人だったが、ゼヴが、ソファに座って対応しているその老人に対していきなり拳銃を向け「惑に向かって立て！」と命令したから、相手はもちろん私を含めた観客も全員ビックリ！この一連のやりとりを見て、やっとゼヴのマックスはアウシュヴィッツで殺された家族の復讐のために、アウシュヴィッツのある区画の責任者だったナチス親衛隊の男を探し求めて、老人ホームを脱出したことがわかってくる。そして、マックスは車椅子で動けないから計画を練り、認知症がちもコトの詳細を書いた手紙さえあればしっかり動けるゼヴはルディ探しとその殺害の旅に出たというわけだ。

＜良くできた本作の脚本を書いたのは・・・？＞

本作の脚本を書いたのは、これが脚本家としてのデビュー作になったベンジャミン・オーガスト。アトム・エゴヤン監督はその脚本を読んですぐに映画化を決めたそうだが、それもなるほどと思えるほどよくできているのは、意外性が連続することだ。老人ホームから脱出したゼヴがまず立ち寄り購入したのが拳銃というのも意外だが、やっと運命の相手ルディ・コランダーにたどり着きながら、実はこの男は人違いだったというのも意外だ。

アウシュヴィッツで、ある区画の責任者をしていたドイツ人の親衛隊員の名前はオットー・ヴァリッシュ。ナチス崩壊後、彼はアメリカに移住してルディ・コランダーという名前に変え、今はアメリカ市民として生きているらしい。マックスが調べたところ、ルディ・コランダーという名前の男はたくさんいたが容疑者は４人に絞り込まれたため、マックスとゼヴは「今が運盤決行の時」と判断したわけだ。したがって、ゼヴは１人ずつその容疑者になっているルディ・コランダーを訪ね歩き、ゼヴの記憶を含めて本人を確定しなければならないことになる。なるほど、なるほど。

しかして、１人目の老人は名前はたしかにルディ・コランダーだったが、ゼヴとマックスが探しているドイツ名オットー・ヴァリッシュの男ではないことが判明したから、ゼヴの任務は引き続き「ルディ・コランダーを探せ！」ということに・・・。

＜ちょっとした誤解が大きな忍耐に！＞

本作の基本ストーリーは、強度の認知症に罹患しているゼヴがマックスの手紙を頼りに、ドイツ名オットー・ヴァリッシュ、アメリカ名ルディ・コランダーを探し復讐を遂げる旅。あくまでそれが軸だが、ゼヴがアメリカに移住してからの間に、その間は到達点に至るまでに沙判車の中での少年との出会い、交通事故に遭った後の病院での少女との出会い等、戦後大きく隔たった世代間のエピソードを挿入し、かつ、いかにも優しいゼヴの人柄を見せていく。こんな人柄にもかかわらず、その左腕に彫り込まれた囚人番号を見ればやはり昔を思い出し、にっくき戦争犯罪人である家族殺しの張本人であるアウシュヴィッツのあのナチ野郎は許せないわけだ。戦後７０年を経ち今では、日本でも「あの戦争」の生き残りが少なくなっているのと同じように、アウシュヴィッツの生き残りはドイツ人もユダヤ人も少なくなっているし、当時の記憶が薄れているのも当然だ。しかして、本作中盤はゼヴがたどり着いた３人目のルディ・コランダーをめぐって、ちょっとした誤解から大きな忍耐が生まれてくるので、そのストーリーに注目！

郊外にある３人目のルディ・コランダーの一軒家にタクシーでたどり着いたゼヴは、ルディが留守だったため長い間外で待っていたが、そこに戻ってきたのが警察官をしている息子のジョン・コランダー（ディーン・ノリス）。彼の話しによると、父親のルディ・コランダーは先日くなったらしい。父親の古い友人の来訪を喜んだジョンはゼヴを家の中に招き入れ、父親お気に入りのチェス関連グッズを見せ、酒を飲みながら上機嫌。ジョンの話しを聞いているうち、ジョンの父親であるルディ・コランダーもアウシュヴィッツで勤務していたことはなく、車のコックで戦争時は１０歳だったことがわかったため、ゼヴもちと安心。そこで上着を脱ぎ酒のお相手をしていると、左腕の囚人番号を発見されたからさあ大変。そこから起きる悲劇があなた自身の目でしっかり見てもらいたいが、そこではじめて見るゼヴの射撃能力もちることなから、ちょっとした誤解から生まれてくる悲劇のサマに唖然・・・。

＜やっとお目当てのルディ・コランダーに！＞

「ヒトラー映画」はたくさんあるが、私が最も印象に残っているのは、トム・クルーズが主演した『ワルキューレ』（０８年）（『シネマルーム２２』１１５頁参照）とブルーノ・ガンツが主演した『ヒトラー～最期の１２日間～』（０４年）（『シネマルーム８』２９２頁参照）の２本。本作では、ゼヴが４人目にやっとたどり着いたお目当てのルディ・コランダーをそのブルーノ・ガンツが演じているので、短い登場時間ながら、本作のクライマックスとなるゼヴとルディとの邂逅が対決に注目！

日本でも中国でも、今や往民のメインは戸建てから高層マンションに変わっているが、アメリカでは都心部はともかく少し郊外に行けばそうではないことが、４人目のルディ・コランダーの自宅を見ればよくわかる。ログハウス仕様のその家は大きく、リビングルームも広い。ルディはまだ寝ていると言う未婚からリビングに寝内されたゼヴは、アメリカに流 past したルディがこまごまの大家族に発展していることに驚いたが、当の本人がガウン姿で登場すると、この男こそ本物ドイツ名オットー・ヴァリッシュに違いないと確信！すると相手もそう感じたらしく、家族には「大事な話があるから」と告げて２人で座に出ることに。

ちなみに、ルディの自宅をなぜこんなに大きなお屋敷に設定したの？それは、ゼヴの入院と、ゼヴがある店でカードを使用したことによってやっと父親の所在をつかみ、ここまで駆けつけてきた息子チャールズとの「ご対面」に時間差をつけるため。つまり、玄関から入ってきたチャールズや２階から降りてきたルディの孫娘が庭に出て、ルディと話している間にゼヴに会わせるためには一定の時間的余裕が必要なため、あえて大きな屋敷に設定したわけだ。

それはともかく、庭に出た２人を心配して、ルディの娘と孫娘そしてゼヴの息子チャールズが庭に出てみると、そこにはルディに対して拳銃を向け「真実を話せ！お前のドイツ名は？」と迫っているゼヴの姿が・・・。これに対して、ルディはあくまでアウシュヴィッツのことを否認していたが、ゼヴの銃が何の罪もない孫娘に向けられ「３つ以内に答えなければ・・・」と脅かされると、遂にルディはアウシュヴィッツでの罪の告白を始めることに・・・。

＜ドイツ名のオットー・ヴァリッシュは、一体誰？＞

ゼヴが探し求めたルディ・コランダーはアメリカ人になって作った名前だが、僅っくきその男のドイツ名はオットー・ヴァリッシュ。したがって、ゼヴがルディ・コランダーにたどり着いた時、異っ先に確認するのはそのドイツ名だった。任意の自白ではなく、拝銃に拳銃を向けられたための強制的な自白とはいえ、そこでルディはアウシュヴィッツのある区画の責任者として大量のユダヤ人を殺害したことを認めた が、ゼヴからの再ミに対する「お前の本名は？」との質問に対して「名前はクニゲエルト・シュトルムだ」と答えたから、ゼヴのイライラは頂点に。

ところが「お前の名前はオットー・ヴァリッシュだ！」と自白を迫るゼヴに対して、ルディは「オットー・ヴァリッシュはお前じゃないか。お前も俺と一緒にアウシュヴィッツの区画責任者だったじゃないか」と言われたから、アレレ・・・。本作では、これ以上のネタバレは厳禁！この後の展開であっと驚く結末は、あなた自身の目でしっかりと。

本作は９５分と短いうえ、クリストファー・プラマーが静かだが緊張感あふれる出ずっぱりの演技を続け、一貫してスリリングな展開を見せてくれる。そして、このクライマックスにおける あっと驚くどんでん返しは実にすごい。ひょっとして、クリストファー・プラマーは本作の演技によって、９０歳でアカデミー賞主演男優賞にノミネート・・・？